

改陸軍中尉中島一郎殿戦死の状況を御報告致し併せて英靈に対する衷心より敬希
の意を表し奉り候 思はば一昨昭和十九年九月五日に於て部隊編成せられたるや
若日勇躍特攻隊員として之に参加直ぐに任地南西諸島に慶良間列島渡嘉敷島
に上陸若き船舶兵特別幹部候補生の小隊長として朝に戦術準備に夕に訓練に専
念致され候時に昭和二十年三月十六日の夜連日の砲撃中末島中の舟工船団長大司
大佐を本島に護送する敵艦艇の真只中を本島に向ひ特攻艇より出発せられ候も
の石船船団長共に消息不明と相成り恐らく前島北西海面に於て名譽の戦死を遂げられた
しものと推察仕候
君は平素よく部下をたより亦將校としての能く優秀にも部隊戦力の中心として部隊將
兵尊敬の的と相成り居候、此が報に接し哀惜に堪えざるもの之有候
嚴寒の折柄御遺族の皆々様御落膽をさるること可かり御自愛專一の程御祈申上候
志不取御報告旁々御悔迄如斯御座候
草一々

一月十七日

九球一七七九部隊長

赤松 嘉次

中島幸太郎殿

侍史

元部隊長殿へ通信より大田船団長より遣本島護送中前島附近に於て敵駆逐艦より氷
雷艇より砲射連り受ける名譽の戦死を遂げたまはれし海上然る夜中幸々艦認
者方消息不明ナリタルも之テ亦如何も致方無キ次第ナリ親戚方其其意ニヨリテ
一應通報シテ区長始々近所方々や親戚カラモ引續き悔ミ挨拶ニ来訪セラレタ
一郎・豊次本隊^在当時、島嶼帖ヨリ象山中協議ヨリテ一葉、寫眞ヲ送致之ヲ島田七
郎君ニ托スレテ當ラフニシタ 二月十日中島方志大エヲ頼ミテ祭壇ヲ製作シテ床間ニ設
ケテ回向スル事ニシタゲアル
昭和二十年二月一日 福毛ノ留守業務部ニキ武平君調査ノタメ出向タ皆本隊ノ生存者ハ
復員ヨリ判明シタ復員ハ三十一年一月十日アマタリ、球一七七九部隊ニ於テモ七十七名復員
シテ居る事ガ判タ近アトシテ六ヶ葉縣船橋市小栗原町四七七番一居 神奈川縣足柄上郡
福沢村大字竹根並木実君等アマタ内山君ニハ帰途自宅ニ立寄リタカ本人不在テ要領
ヲ得テカタト事ヲアマ内山君ニ判テ居ル件ヲ御通知ヲ頼ムヘク頼ムト事ヲアマタ
一應内山君並木君外三人ノ人々ニ対シ照會状ヲ送シテ見タ内山君カラ二月十三日附テ左ノ様
ニ返答ガ来タ
前略御返事ガ鑑此ニ御に申訳ありまけんハ生けず一甲隊でした中島ヲ慰殿とは其の如
ク善ク居りました渡嘉敷敷をミテ基地に配置シ小笠原南端の阿波連と云ふ部隊に居りました

三月二十三日空襲以来全部隊が島北端の留置加波と云ふ小部隊に集結し以後終戦迄一休も取りました中島少尉殿が船田团长を本島附近に送り舟艇に送る爲に舟艇に渡り加波島より行かれたと云ふ事は部隊長殿のお知らせ通りです。其の日は沖繩本島と結絶え消息不明です。部隊長殿の御便り以外別にお生も知りません。

下は端書に誠に失礼乍ら右御返事迄ト云ふモテアタタ
並木実君より封書ハ一部部下トテ当地ノ状況モ詳細ニ記テアリ且感想モ述懐ニシ
カシクモテ讀ミテカウ感涙深ク文デアラウ
拜啓御手紙本日拜見致しました。感涙深キ折御同務には何の御褒りもありませんが小生もお陰様にてお元気です。居ります。

此度お隊長殿戦死の報に接せられ御一同の御歎き如何許御心中御察し致します。一度御伺い致し有りし日の小隊長殿の御務などお話しせめての御慰みと思ひつゝ御手紙を戴き迄本當に手若く至らぬ者御許し下さい。

ヤ生特幹に隊して(重彦)新編成にて御健に向お迄は小隊長殿の指揮下にあり色々御世話に有り又又御健で小隊長殿が皆本隊の檢査係をも居られた時助手として之御世話に有る者です。小隊長殿は農校出身で大差元氣な方でした。三人の小隊長の中や二番元氣な方或る日は水泳に或る日は相撲も良く吾々とも元氣な思ひ出しても三番

此となり又悲しく感じます。事は小隊長殿が船田团长日本島に送り行かれた日お小生は小隊長殿と一緒に出發用意を致しました。小隊長殿が愈々出發される時

「小隊長殿無事任務を遂せられ級上げを待たます。」有難う元氣で後を頼む。其の最中、お隊長殿が小隊長殿と暮らす系、お隊長殿が再び歸るまで来たか、たのや。手紙等は色々手段で小隊長殿の事を調べて見ました。大船での出来事らしく何の手紙もありませんでした。残念で有りませぬ。部下思ひの小隊長、終戦直に沖繩に於て戦死と認るは先づ小隊長の事でした。

今更にお隊長がどんな人であったかは御同務が一番良く知らる。事やせう吾々が番隊とく違ふ時は兄と思ひ訓練中は教官とも慕つて来た位に部下思ひでした。何ほともあれ部下の事を思つて下さいませ。

如何に等々を讀むても重くは續き止る事を知りません。必ず一度御伺ひしと詳しく御話し致し又小生も小隊長殿を御拜しと戴きたく思ひ居ります。

何卒御同務御歎きは本當につきません。然し御作でも悪くはなば小隊長殿もどんなに地下に御心配されるか解りません。何卒御作が一番で御作ります。暖かい方へ向ふと云へ今猶相當な折分御作も大切にされん事を遙か当地より御祈致しと筆を置きます。御同務によるしく御待へませ。

ニ仰 此の手紙かつ山生御伺ひにせて戴きます
十生が隊長殿の御手として傷き居ります頃小隊長の(二群)部下として池田君が居りま
す此の方が隊長殿の当番に居られた故御便りも出されしと何かとお判りになるこ
とが御旨ですも知れませぬ任所を御知れし致します
草一々

北越道函館市飯場町三池田守一郎方池田文三

昭和三年二月二十日

並木 実

中島善太郎様

並木君の御手紙ハ吾々遺族ヲテ深イ感動ヲ興ヘラシタ小隊長一郎部下トテ又
部下が小隊長の部下ト断つ迄ニ慕ヒ敬ヒ且其ノ戦死ヲ心カラ指シミフ赤誠ヲコトテ書
カシタ此ノ一紙ヲ讀ムテ今更ニ地々感涙ヲ覺エタゲマタ若イ特許生トシテ並木君ノ人ト
シテ感ハズニ居ラシカクテ斯様ニ良キ部下ヲ得敬慕セシカラ國ニ殉シテ南西ノ海ニ
没スル一部モ又賜スル事ガ出来デアラウ

並木君ハ其ノ任三月廿日自刃ノ橋次利カラ見舞子ノ末訪セラレタソシテ靈前ニ御香草ニ
御供下サシテ暫時御臨忍礼拜セシタ一郎ノ靈モ此地真ニ部下トシテ並木君ニ心
程ニ面會シテ感涙無量ノモカント昔ニ大ニ感激シテ居ニ置テアラウ並木君ニ座ニ
就テ當時ノ状況ヲ更ニ詳ク御話下サタ一郎ガ良キ部下ヲ愛シ部下又一郎ノ兄ノ如ク

幕中居事ハ並木君儀礼的ノ品群ニテ大サカラ遺族トシテ考ヘテ一郎ノ性實トシテハ
部下カラ非難憎嫌セズ棟ノ行爲ハナカララウト豫テ考ヘテ居タ並木君ノ心カラ敬慕
ノ念ヲ以テ一郎ノ当時ノ事ヲ話シテ下サタケタマフ私達ハ並木君ノ如何ニ特許生トシテ地
心ヲ持テテ感謝ノ思遠方ヨリ御厚情ヲ謝シタゲマタ 三月九日 並木君カラ唯抄状ヲ送取
「前略」昨日は突然御伺ひ致し大層御迷惑相掛け又吸止は結構有るもの祝ひ載せ
何とも御礼の甲斐もありません此の旨一同よろしく申しこれと云フ旨居ります 自分
も元気で大いやりませす 自分も小隊長殿が吸止を承られる様な気もします 心中毎日御祈
り致し居ります 三月十日云々未だ此巻ニ事致御作又大切に世帯に充分目録取甲上
下云々 草一々
小隊長が月廿日飯ツテ来ル事ヲ心中カラ毎日祈リ居ント云フ並木君ノ手紙ノ御厚意ヲ
伺ヒテ感謝シテ良キ有難キ事デアラウ
三月十三日 弟武平君モ一郎ノ戦死ニ付テ非常忠心配サケタ二月廿日葉書ヲ福澤
守守業務部ニテ調査ニ行キ帰リテ船渡ノ四山君ノ復ニ能ク立向ラシテケル
リ云々今度京都大阪方面ノ旧友ノ招キヨリテ同窓旅行多具ノ節兵庫路ノ新川町
赤松元部隊ヲ訪問シテ當時ノ事ヲ具ニ御尋ネスルコトが出来タ亦松代ノ御宅ハ元来
当大サナ商家カラ立派ノ御住居デアラウ弟ノ来訪ヲ非常中絶ハレ遊ニ泊迄ニ御厚意

敵機一部戦死、状況ニ付テハ當時日記帳ヲ繰リ返シテ詳細ニ説明セシメテ大野隊
隊長ヲ召集シテ其ノ護送中前島附近ニ於テ消息不明トナリ、軍ニ於テハ終ニ手段ニ至
リ探査ヲ行ヒタルニ否トシテ其ノ所在ヲ確ルル事ヲ得ズ、前夜ノ状況ヨリテ北烈ハ戦死
シ遂ニラレタモト認允ル外ニ、田中御話ニテタトノ要ヲテハ一部ノ戦死ニ付テハ誤ラズ、敵ヲ
急テ表セシメ、軍前ニ懸待シ御香奠ヲ御供下セタ事ハ感謝ニ堪ヘ又事デアラフ
尚ノ葉ノ留守部隊ニ於テ、球ニシテ九部隊員ノ戦死ハ、部隊長殿直接出頭ニテ續キ
終了ノ上公報ヲ出スト、話アリクニヨリ、其ノ中ハ上共ニ近ク其ノ運ニ至ル所御願ニ付
ノ葉出張ノ御ハ是非御立寄リ方御願ヒトタト事デアラフ

赤松部隊長戦場日記ノ一部

二〇、三、二二 晴

敵機約延三〇機、慶良間列島ノ爆撃ヲ銃撃ヲナス
戦死者百傷者各十名、兵器糧秣其ノ他焼損

二〇、三、二二 晴

敵機約延三〇機、常時在空中ニ其地設備地上陣地獲息設備山林終各ニ
爆撃ニ至リ燒夷彈投下、軍情勢ニ依リ敵機動部隊ハ首尾起莫一六〇度ニ
至リ、果實ニ進接シラレタモト地ニ...

新戦場若干兵器器材糧秣若干損害アリ

二〇、三、二二

敵機常時在空中ニ一四〇機、主目標基地設備並ニ地上陣地ニ対シ爆撃燒夷彈並ニ
及銃撃ヲナス、敵機動部隊ハ巡洋艦駆逐艦砲艦等ヲ五隻慶良間列島
ニ侵入、我が地上陣地並ニ基地設備ニ対シ猛烈ニ艦砲射撃ヲ加フ
船舶团长基地隊長以下各座自隊員ヲ殺傷セテ阿波連ニ上陸、嘉嘉島本部
ニ至リ、軍並ニ軍艦部隊ヲ部隊(戦隊)ニ対シ、那覇朝ニ前進會合ヲ受領ス
勤務隊主力ニ整備隊一部並ニ水上勤務隊一部ハ船舶隊長ノ意向ニ依リ渡嘉
敷ニ残留、敵ヲ邀撃シテ決ス、三三〇部隊全員ヲ以テ舟艇泛水作業ヲ完了ス
戦カ方ノ損害

人員死シ、兵器並ニ器材糧秣若干焼失、基地設備若干損害

二〇、三、二六 晴

渡嘉敷基地ニ全舟艇ハ泛水並ニ出発準備ハ完了スルモ泛水作業思フ迄水ニ出テ
ラ要シ出発準備完了ハ掃蕩ニ直ク然モ敵駆逐艦魚雷艇、慶良間海峡ニ遊チ
シ那覇前進ハ不可能ノ状態ニテ、部隊ハ他日ヲ期シテ、各々ニ甲隊ノ二艇ヲ殘シ、全
舟艇ヲ渡嘉敷志久灣ニ自沈ス、阿波連基地ニカニ甲隊泛水ハ阿波連湾内ニ敵駆

逐艦並ニ臭留挺アリテ泛水不可能ナリ。敵機常時ヨリ爆撃並ニ渡嘉志久湾
ニ敵艦艇數隻ヲ以テ艦砲射撃ナリ。又撃子目標ハ自沈舟艇地上陣地糧食發
備ニシテ猛烈ヲ極ム。部隊本部艦艇ニ輕進ス
船の团长甚地隊長鈴木少佐外一名那覇朝陽隊ノ多身艇ニテ出発ス
中島少尉竹島候補生八掃艇手トシテ整備隊下工官一ノハ即手トナリ出発ス
損害 戦死一水上勤務隊隊員天ニ名 負傷一名

三月三日 晴 曇

敵艦戰艦ハ常時ヨリ艦砲射撃ヲ熾烈ヲ極ム
艦艇又慶良間列島同翅ヲ遊ナシ艦種不明ニシテテノ數隻ナリ

三〇〇部隊長以下本部主力ハ想天ヲ徹退シ渡嘉敷北方復都陣地ニ向フ
部隊重要書類ハ整備ヲナシ想天ニ埋没ス

南少尉以下五名儀志布島附近遭難ニシテ少佐以下五名搜索ニ出発ス 以下略々

赤松部隊長ノ戦場日記ハ簡略ナドモ戦闘苛烈ノ状況ヲ能ク知ラザル大所船舶同長
ハ部下十五名ヲ従ヒ三月三日座間味島ヨリ渡嘉敷島本部ニ来リ戦局ノ大勢ヨリ全隊ヲ
神鏡本島ニ引去ルベク全舟艇泛水ヲ行ヒタルモ時既ニ遅シ出発不能ナリ。遂ニ吞テ全舟
艇ヲ自沈シ自カラ残ル舟艇ニ隻ヲ以テ砲爆撃下敵艦艇ノ真只中ヲ叩壊本島ニ歸

隊ヲ命シ中島少尉竹島候補生掃艇ニテ出航ス番艇ハ儀志布島附近ニ於テ遭難

一掃艇ハ當時前島附近ニ路本島指テ航進中ニ遂ニ消息不明ナリ。又ハカテアル

元部隊長赤松嘉次殿ノ御厚情ヲ深謝シテ此ノ記ヲ終ル

二六三三三 一節戦死ノ情報ハ部隊長ヨリ通知更ニ部隊長殺シ直話ヨリ又並末意

ノ系談談話ニシテ全隊明瞭ニシタカケルガ二月十七日附、二月二十日音到着ノ元球ニヤヒル

部隊既本隊長官本義博代ノ御慰問状ト更ニ細密ニ百元當時ノ情况ヨリ綴

ル文書ノ御報道ニヨリ御雅心ノ判断ヲ下スコトヲ得ルニ至リ。比日本中隊長殿カ部下

ニ部少尉ノ河元九情ノ懇切ナルニ對シテハ吾等違々感謝感激ニ堪ハカル所ナル

以テ本隊長殿ヨリ御厚情ノ全文

謹ニ敬謝中島中島一部隊ノ御英魂ヲ奉リ衷心ヨリ敬希ノ意ヲ捧リ茲ニ

謹ニ其ノ状況を奉ル中上候

昭和九年三月一日守島に於て海上挺身ヲシ戦隊編成スルヤ君と同じ部隊に相まみえ

其ノ功ヲ以テ隊として出征シ候

昭和三年三月三日突然として我ニ基地に對する敵の砲爆撃開始以來理得本

島に先立ちて戦闘開始ニ至リ候

中島中尉ハ先來蒙殺果敢思慮極めて維密且温厚守島實に比當中に部下



我が弟の如く思ひて指導せしル中隊の兵唯君の部下ならず一年に至るも君に
敬服せしむる者無く吾が兄の如く思慕し佐民亦「中島ヲ尉統」と到る處にて
君は君たるも尊厳を私ひ居り候。かつて佐民の声を聞きしに私達も中島たるの
部下にたりたいと之を眞にいつはりおる声なりき中隊に於ける君の眞の武人としての
徳操眞に昔の偉大なる武人に接する如く君在りて中隊は眞に明朗なりき。

三月三日より攻撃も開始せる敵は三箇に在るも尚之を止めず遂に其の熾烈の度
加へ来り候。午後三時より慶良間列島海上挺身戦隊(海上特攻隊)の戦闘準備
状況を視察中なりし軍艦中隊長大町大佐二十四日我が渡嘉敷島対岸阿嘉島
に在りて状況を判断せし。海上挺身隊は直ちに中島本島に転進全地に於て
海上攻撃に参加すべきを決心し二十五日夜四時を待てて霧艇によつて敵艦艇群を突
破我が渡嘉敷島に到着直ちに転進命令下達す然れども時刻既に三時
を経過し当時部隊は戦隊(艇東員)は霧艇に待て置き待機準備中なりし。北
部隊は霧艇を整備して水上に於ける諸基地勤務員は敵の上陸に備へ海岸に配備
しあり命令受領後霧艇を飛ばし全員を任せしめ、艇の逐水にかゝるも時刻の進
延と体力の疲勞資材の消耗との為予定の如く進捗せず、業終りたるは三月二十五日
午前四時頃にして之より三哩の海面に霧艇を向け敵中隊突破を行はんと日出候。

我が艦が損害の招来は火を見るよりも明かにして之を大町大佐中止せんとせらる。未だ部隊
長は茲に於て獨り全艇を以てする敵艦艇攻撃を決心せられたるも軍命令之無き
は不慮海面に待期中なる。同僚部隊の全回秘匿全のため隠匿にすべき旨の指
示も受け日出迄に之が曳揚艇匿もなさんとする然れども日出漸く自り敵の水上偵察
艇の艦艇出現する公算大にして危く我が全回を暴露せんとするに及びて
未だ揚舟艇の自記を命じらる之に於て各員は涙を呑んで自記せしめたり。
僅に秘匿終了たるのは当時隊に唯二隻なりき、船舶回長大町大佐は転進の企図挫折
す。遂に中島本島に到り軍艦中隊長として軍艦部隊を作戰に運用す。其の
痛感も亦三月二十五日の夜各回に各隊長を集令せしめ自己の企図を披露せられ
候。彼は大町大佐以下各回海面約二哩を突破するに決し、嚴なる人選をなされ候。
前日の艇白刃の際当時隊に僅か二艇のみを残したるに依り当時隊より擧げ若將校一
下二名を免出さへ命を度くかねて氣象徳操能力最も優秀なりと認めに於て
本軍大任務遂行し得る者中島ヲ尉を指きて他に無き旨、衆議一決、君は竹下隊長
と共に本軍大任務遂行の任に當らる事と相成候。
當時に於ける要領状況
第一番艇 軍艦中隊長大町大佐
第二番艇 中島基徳隊長
第三番艇 三池大佐

獨三大隊長 鈴木少佐
 船砲隊副官 山口中尉
 標 旗 甲島少尉
 警備 土肥憲兵

獨三大隊附 新海中尉
 船砲隊附 木村少尉
 標 旗 竹島伍長
 警備 四束憲兵

而して兩艇は何れの艇も事故の故に互に故障してはならず、那珂島港に向け前進すべしと云ふ
 悲憤なるものありき。

君の任務も遂げざるや、遂に船中を命じ、將校全員の隊内を命じ、君の壯行を祝す
 君は終始にシクとして一時に變らず、豪放果敢なる君は「す行こ参ります明日の晩
 は又戦つて参ります、何かお土産を持て参ります」と実に到るべからざる大悟道の
 状態なりき、中隊全員の送別を度り、部隊長以下多数の見送りを度り、出発せられ
 三月二十六日二十三時三十分をかりき。

無敵なる公認せられたる君等の艇は別記要図の如く島を北に近、何那朝に差針し
 前進せられたるや、遂に船中を命じ、將校全員の隊内を命じ、君の壯行を祝す
 行中が沈み、遂に海水が噴き出し、渡り流島東岸に難波漂着す、三少佐以下
 は遂に於て遊泳により到着す、や二番艇は事故無く前進、や二番艇故障の時、
 三少佐は立って進行し、ありて前島南側にあり、遠慮なく特攻艇は出撃せしむ

（二）或は元果長が、中隊司令官に於ける状況判明せしむ

然るに陸上電に依り、船砲隊に連絡するに未だ到着せずと再三連絡するも判明せ
 ず海上も完全なる危険海面にともなく状況を知らず、終戦後沖繩本島に
 到り船砲隊の船砲隊各部隊並に三三三軍司令部につぎて大野大佐以下の状況を
 尋ねるに否として判らず、或は全部生存にして南方洋上の離れ島に在り、或は逐
 逐艦の攻撃に逢ひ全員壯烈なる戦死なりと言、漠々たる有様にして、
 状況を知らず、先右の状況を判断するに戦死せられたるものならんと判明す
 るに到らざるべからざる様にして、内地帰還後復原期に於ては戦死確定なる
 定せられ候、や官直ちに御家族の方々に報告申上るべきこと判断は候も、戦死の状況
 確認者無く若しも然らざるに有るもの如く思ひ、数方は連絡中にして甚だ先礼を
 ら延引仕候、何卒御含み下さるべく御願ひ申上候
 或は戦死確定なるやも知れずと思ひ、君の遺品有りとも思ひ候、共君の歸す
 行李は当番艇に全部積込みたるを以て之を御届け申す事かなはずせめても、
 存じ君在りし日君の起居せられたる宿舎の君の草花を作られたる附近の白石
 を御遺骨として御届け申すべく、拙宅に安置致し居り候、近く御宅に御届け申す
 べく心得候、共確定なるや否や判らざりし為、御遠慮仕候

甚だ要を得ず乱筆を以て申上候段何れ下御返答下さるべく御後甲上候
 御家族御方には何れ御力落しなく御蒙し下さるべく御祈り御後仕候。内地帰還
 右君の勲功絶大なるものあり殊に勲者として上申致す候向茲にお知らせ申上候
 二月十七日
 元球一六七七九部隊比皆本隊長 比皆本義博
 中島幸太郎殿



遺族の事達ハ皆本隊長殿の手紙ヲ讀み悲しみ全時三度入トシ御返答を御事公
 出葉タコト陰乍ラ甚ダ、部隊長殿、甲隊長殿ニ惜愛ヤシ、部下特
 慕サシ、軍船舶団長大所大佐上生死ヲ共ニテ南西ノ海ニ散葉シタ事ハ本人トシテ本
 望デマワラウ、遺族亦以テ自ラ慰ムルモデヤレハナラヌ
 ニニ三七 皆本元中隊長殿ヨリハキキニテ来信アリ三月十日癸ニテ一部ノ遺骨代々御
 届スバク家ニスルカラトノ通知ニ接ス多分ハ高塚金子殿ニ着ク事ト考ヘ三月十一日
 ニト、取送出廻ノ為ノ手配ヲシタガ、皆本元ハ遂ニ見エラレシカク、遺骨ニヨリテハ
 本元能ク熊本ヨリ御持参下セハ悲痛ノト故当方ヨリ引渡セシ事ハカク、返事直事送
 ニニ三三 皆本元ヨリ左ノ電報ヲ受領シタ、二四二一九五五ケヤクニテユクヨクニシテモ止
 信ハ肥後四水局ニ至リ午前十一時三十五分金子局受領信ハ二五二〇五午前十一時五十分ナ
 ヲテ届タ、一部ノ戦死ニヨリテハ禾ダ公報ハ發セラレシカク、今度中隊長殿ヨリ能ク御持
 参下サルハ金多隊長殿ノ御厚情ニ依ルモテ、然レ公ニ軍ヨリ交付セシタレモテハ無
 イ叔其取扱ヒニモ考慮シタ、役場ノ方ニハ一時遠慮シ本義博ノモスル時立會テ頂クコ
 トニシテ大守ノ方ダケハ区長サニ其ノ話ヲ伝ヘタ区長ノ一紙ニ出迎等ハ深ク遠慮シタ、特ニ
 時間ガ午前十時過トモナル故出迎ハ頂ク事ニシタ、大守ノハ御議ニ上役員タケ取送
 出迎ニ出テハルト、返事ガ来タ

二十四日十九時五十五分、東京駅夜入時值、東京駅迄出迎へ、相済又事故
武平君、東京駅ヲ皆本ハ、見ハ困難故、横濱駅マテ出向キ、列車中ニ出迎へ、
打合せテ午前中出カケタ、尚水村貞吉君又折号来合セタ、村田浅吉君トモ打合せ、
后七時横濱駅ホームニテ三人落合、約東ト各準備、午後三時、水村、村田、雨君
ハ出立ニタ、夕刻ヨリ地類、方々モ来ラタ、大字役員ハ一應出立ニテ、才待テ、
右十一時豊岡駅迄傳令ヲ使シテ、皆本代着、上ハ谷田附近迄出迎ヲ頼、
配ニタガ一、般ハ寒風中豊岡駅迄出迎ニ出立セシタ、最終ノ電車ハ、午後十一時三
テアタガ、遂ニ皆本ハ見エシテ、横濱迄出立、三人ハ空ニ帰リテ、来タ家ニ戻、
テアタガ、電カカラ考テ皆本代、出立ハ疑フ、余地ハナカ、何分能本ヨリ、上京テアリ、
時間ニ予定カ、悪更サレ、トモ、想像シテ居タ、近所ノ人達ハ、全ク甲斐ナク、
モ致カ、テ、御了承、頼フヨリ、外途ガイカワタ、然シテ、
シタ例、戦死自ハ、次日トシモ、出立日カ、命日トナリ居シ、
知サレテ居ラ、ハ、明日、ニ、
ノ事ニシタ

ニ、
テ、
ノ事ニシタ

テ、
ニ、
ノ事ニシタ

英靈八具、床間ニ祭壇ヲ設ケ安置セシム。近親者ト近所者ト、先奉集ヲ願ヒ焼香
ヲ願フ。大守ノ人選スニ、十六日命由ニ付、聊法要ヲ營ミ、参列ニ上焼香願フ事ニ手配シタ。近
所ノ方ハ地類、紐合ノ方ミデマツタ。親戚ハ村田代ガ居テケタ。一同焼香拜礼ノ上、皆本代ヨリ
一場ノ挨拶ガマツタ。オ証ハ申出、幾リ慶良間列島、遠嘉敷島ニ於テハ、戦開ノ状況ト
大野船団長、護送ヨリ一部ハ殉難ノ点デマツタ。前島附近ニ於テ、遂ニ消息不明トナ
ル。詳細ニ説明セシ、戦死ヲ認メサレテ得ガレ、状況デマツタ旨、証セシ。一同感涙ニ咽ビテアル
。午後一時半、席ヲ終了シ、近所ノ人達ハ、明日ニテ、午後一時、英靈法要ニ出席方、親戚方ニ
通知ヲ願フ。皆本代ハ、四日、長途ノ旅行ノ疲ヲ休ムベシ、就床ヲ願フタ。

ニ、三、三、六、一、部、戦死ニシテ、白朝一時頃、アマツタ。然レ、特攻隊ハ、出發日ヲ命ジテ、
事カラ、本日ヲ命ジテ、今日ハ、其ノ周年ニ相当シタ。午後一時ヨリ、元中隊長、皆本義博代
参列ニ上、豊泉寺、肉戸法丈ニヨリテ、法要ヲ營ム事ニタ。親戚ヨリハ、島田修一部、比留間
市之丞、斎藤よし子、なみ子、村田忠司、田中兵衛、石川金次郎、和田幸一、松本
友天、諸代、近所ハ、区長外、役員十六人、地類、紐合等、参列。関戸代、法要ヲ嚴肅ノ裡ニ
營マセシ。一同焼香、礼拜。昨日、例ニテ、皆本代ヨリ別記ニシテ、神機、戦死ノ一部、戦死ノ情
况等、詳細ニ巨テ、御証下シ、一同感涙ノ裡ニ、法要ヲ終了シタ。
英靈ハ、一先公報ノ上、近祭壇ニ、安置願福ヲ祈ル。下シ、何レ、不日奉儀執行ノ節

村及大守ノ配慮ヲ願フ。トシタ。親戚ノ方、遠及大守ノ役員、諸代モ、右ヨリテ、御了承
ヲ願フ。タ。テ。アル。

ニ、三、三、六、元球ノ七九部隊長、赤松嘉次代ヨリ、一部、戦死ニ、週年ニ際シ、書問ノ手紙
ヲ頂テ、深ク感謝シタ。

拜啓陽春ノ候ト相成候

其ノ后、久しく御無音ニ打過シ候。御遺族ノ皆、御存じ如何お慕シ候。御伺申、
先達ニ御令弟、御末宅ノ御印、何レ、御待過モ、御得テ却テ結構。御
を頂戴。いたし厚く御礼申上候。

光陰当ニ矢ノ如く、一即中尉、戦死致。此より早や、下年ト相成候。一即、一、
忌ニ當リ、謹みて御照福を御祈り申上候。願ひは、激しかりし戦闘も、多ク、
亦元氣なりし当時、訓練に、娯樂に、打興。いたし、移や、決死行ノ出發に、當リ、同期、
の送別も、断り、笑ひ、下ら、敵艦艇ニ、兵只中ノ、突破を企テ、出發せられし、勇姿も、
出され、感涙、一、夕に、御座候。
敗戦ノ今日、御遺族ノ方にも、何かと御苦勞多ク、御事ト存じ候。何レ、御援助も、成
し得ず。生も、續けり。吾ガ身が、なすけなく、感せられ。次第に、御座候。何レ、御遺族
下ノ、誇りを、堅持せられ。故人ノ御照福を、御祈り。被下度候。

春は甲候も亦元氣候も不順少折柄御自慶事一程御祈甲上候
右不敢取一固忌二當り御挨拶迄此斯に御座候
敬具

昭和二十一年三月二十六日

赤松 嘉次

中島幸太郎

侍史

中島一郎中尉移動略歴(三月二十日自日本武博代記)

- 一 昭和十九年八月二十日 香川縣小豆郡小豆島特幹隊出發
- 二 八月二十九日 船練習部中尉教育隊到着(小豆島江田島)
- 三 九月一日 動員完結(海上挺身隊三戰隊中隊付)通稱号
曉一六七九部隊呼稱に到着ニテ球一六七九部隊ト改稱ス
栗船(玉来丸三三〇噸)
- 四 九月九日 宇呂港出發
- 五 九月十二日六時 門司港岸壁到着
- 六 九月十四日午後 全右出發
- 七 九月十四日三時 平戸到着
- 八 九月十四日五時 平戸出發

昭和十九年九月十四日

熊本野天軍部中隊到着

- 一 九月十五日朝 全右出發
- 二 九月十五日夕 鹿兒島到着
- 三 九月十五日夕 鹿兒島港中隊回航
- 四 九月十六日五時五分 沖繩本島北端海面ニ突撃射撃ニシテ北岸ニ
- 五 九月十六日十七時 那霸港着
- 六 九月十六日十九時 那霸港着
- 七 九月十六日二十時 那霸港着
- 八 九月十六日二十時 那霸港着
- 九 九月十六日二十時 那霸港着
- 一〇 九月十六日二十時 那霸港着
- 一一 九月十六日二十時 那霸港着
- 一二 九月十六日二十時 那霸港着
- 一三 九月十六日二十時 那霸港着
- 一四 九月十六日二十時 那霸港着
- 一五 九月十六日二十時 那霸港着
- 一六 九月十六日二十時 那霸港着
- 一七 九月十六日二十時 那霸港着
- 一八 九月十六日二十時 那霸港着
- 一九 九月十六日二十時 那霸港着
- 二〇 昭和二十一年一月十日 任陸軍少尉
- 二一 三月二十二日 大町船中隊長作戦計画視察ニ屢々開列島ニ来リ
- 二二 三月二十三日 戦闘開始(敵艦戦機ニ空襲ヲ開始ス)
- 二三 三月二十四日 右ニ空襲ヲ行ヒ銃撃ヲ猛列ニ極メタリ
- 二四 三月二十五日 敵空襲ニ共ニ艦砲射撃ヲ開始ス
- 二五 三月二十五日夜 敵船隊長大町元佐阿嘉島ニ到着(沖繩本島ニ進駐ス)

二六、昭和三年三月十六日四時三十分 輕進不可能トリテ特攻艇自那ヲ令ス
 二七、三 三月十六日三時 中島少尉竹島位長ニ対シ護送ノ任令セリ
 二八、三 三月十六日三時 渡嘉敷島渡嘉志久出發
 二九、三 三月十六日一時〇〇—二時三〇分間ニ於テ戦死セリタルモノ如シ

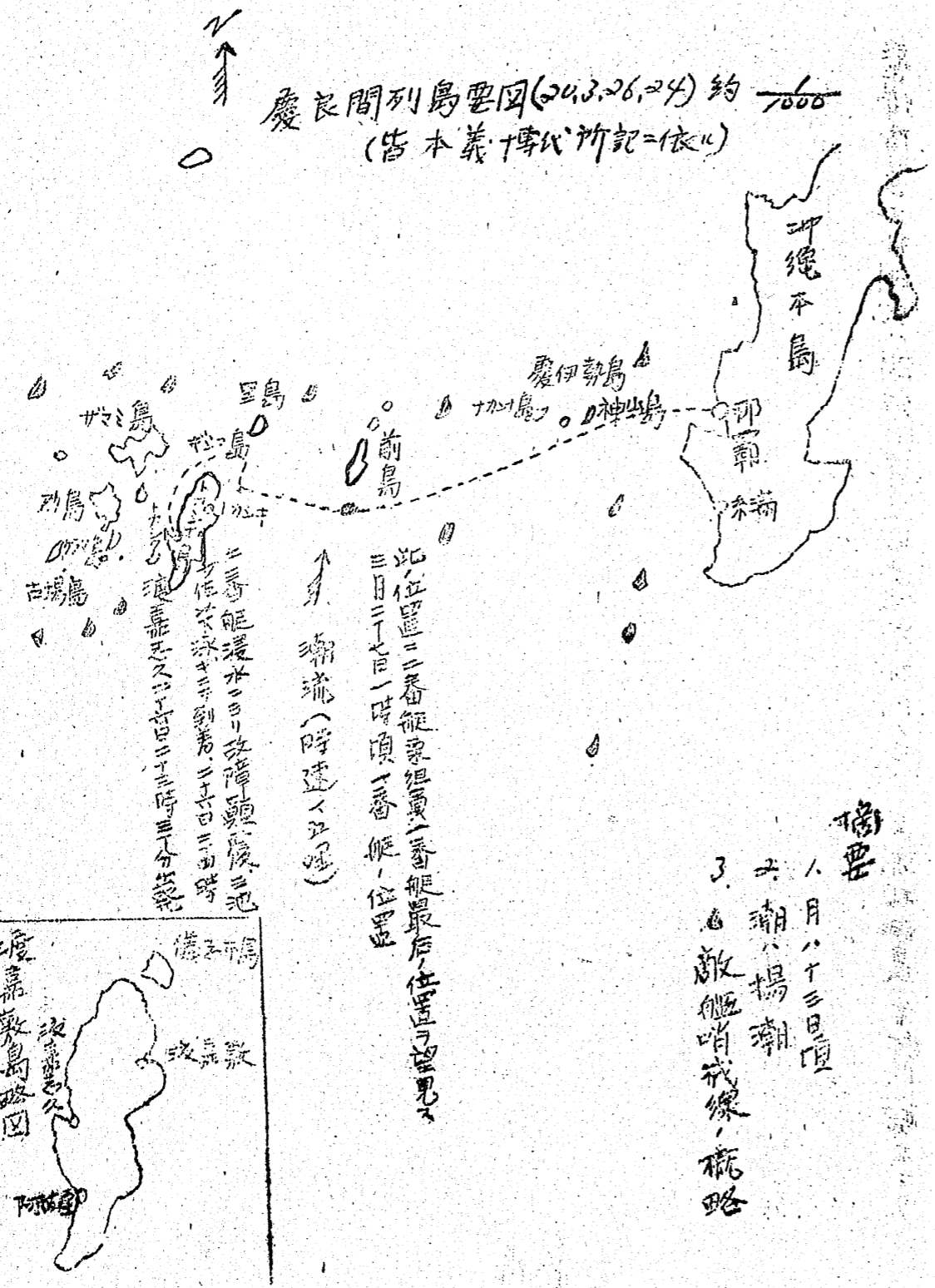
摘要
 東畑状況

一、番艇
 軍艦船隊長 大町茂 大佐
 孤五才三隊長 鈴木常良少佐
 軍艦船隊副官 山口栄 中尉
 操縦手 中島一郎少尉
 整備兵 土肥枝位長
 二番艇(×印ハ戦死セリタルヲ判明ス)
 孤五基地隊長 ×三池少佐
 孤三大隊 附 ×新海中尉
 孤五基地隊 附 ×木村少尉
 操縦手 竹島位長
 整備兵 田中技士等兵

三、番艇六遺難一番艇ト別名ハ二七〇一時頃ナリ
 三海上挺身第三戰隊(球一六七九部隊)

部隊長 陸軍少佐 赤松嘉次 副官 陸軍大尉 辻政弘 整備隊長 陸軍大尉 本林明
 才二隊 陸軍中尉 某代 才二隊 中尉 富野稔 才三隊 隊長 三皆本義博
 整備隊長 本林明代(八間畑福生支那主任本林代息) 土肥枝位長(本林代部下ナリ)

慶長間列島要圖(20.3.26.24)約 1/1000
 (皆本義博代所記ニ依ル)



摘要

1. 月八十三日頃
 2. 潮揚潮
 3. 敵艦哨戒線、概略

此位置ニ番艇東畑最後ニ番艇最後ニ位置ヲ留メ
 三月十六日一時頃一番艇一位置

二番艇還水ニシテ故障顯後三池
 少佐等ニ到者ニ十六日三時頃

